

## 岩手県を中心としたしいたけ原木・おが粉流通の変化

統計資料から見た北海道・東北の動向

### 1. はじめに

岩手県では、原木しいたけの生産が古くから盛んに行われてきました。中でも乾しいたけは、全国上位の生産量を誇っています。また、県内では菌床しいたけの生産も盛んであり、主要な産地のひとつとなっています。しかし近年、生産者数や生産量はいずれも減少しており、特に、平成23年の東日本大震災に伴う福島第一原発事故以降、その減少は顕著となっています。

こうした変化は、しいたけの生産だけでなく、栽培に不可欠な原木や菌床用おが粉の流通にも影響を与えていると考えられます。

そこで、本稿では、農林水産省の統計資料※を基に、原木及びおが粉の原料となる丸太について、震災以前の平成22年と最新の令和6年を比較し、供給量や供給先がどのように変化したのかを整理しました。

### 2. しいたけ原木（原木栽培用）

#### (1) 平成22年（図1、左）

まず、平成22年の状況を見ると、岩手県では県内向けの供給量が約2万

5千㎡と大半を占めていました。一方で、北海道や青森県、宮城県へも原木を供給しており、県外向けの供給量は約2千㎡となっています。

また、全国でも有数の原木供給県である福島県は、県内向けの供給量が約2万㎡、県外向けの供給量が約2万7千㎡でした。図1、左のとおり、東北南部などの広い地域へ原木を供給していたことが特徴です。

#### (2) 令和6年（図1、右）

これに対し令和6年になると、原木の供給状況は大きく変化します。まず、全国の流通量は平成22年の約3割まで減少しました。

岩手県では、県内向けの供給量が約6千㎡まで減少した一方で、県外向けの供給量は約4千㎡に増えました。さらに、供給先も平成22年に供給していた地域に加え、山形県や福島県へも広がっています。

福島県は、県内・県外向けの供給量はともに約300㎡まで減少しました。その結果、平成22年には福島県から供給されていた山形県への供給元が岩手県に置き換わり、さらに

#### 平成22年

流通量  
全国 532,254  
北海道・東北 66,182

(単位：㎡)



#### 令和6年

流通量  
全国 153,989  
北海道・東北 13,677

(単位：㎡)

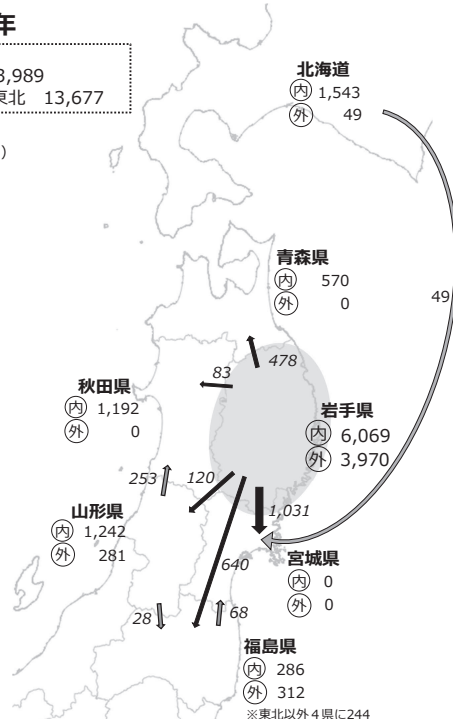


図1 しいたけ原木（原木栽培）の流通状況

(出典：農林水産省「平成22年特用林産基礎資料」及び「令和6年特用林産基礎資料」を基に作成)

凡例

(内) 県内向けの供給量 (外) 県外向けの供給量  
岩手県から供給 岩手県に供給 他県間の供給  
5,000㎡以上 1,000~10,000㎡ 1,000㎡未満

山形県から福島県へ供給されるなど、供給の流れが変化しています。

### 3. おが粉（菌床栽培）

#### (1) 平成22年（図2、左）

次に、おが粉の流通状況についてみていきます。なお、原木との比較ができるよう、おが粉の体積は丸太材積に換算※2して示しています。

平成22年の岩手県では、県内向けの供給量が約5千m<sup>3</sup>、県外向けの供給量が約3千m<sup>3</sup>であり、一定の供給力を持っていました。

また、県外向けの供給量は福島県が約2万m<sup>3</sup>と最も多く、これに秋田県や岩手県が続ぎ、岩手県も有数のおが粉供給県の一つとなっていました。

#### (2) 令和6年（図2、右）

令和6年の全国のおが粉の流通量を見ると、平成22年の約8割であり、原木に比べると減少は比較的緩やかです。

岩手県においても、県内向けの供給量が約4千m<sup>3</sup>、県外向けの供給量が約2千m<sup>3</sup>と減少は見られるものの、原木ほど大きな落ち込みはありません。

一方で、福島県の県外向けの供給量は約300m<sup>3</sup>と大幅に減少し、その代わりに北海道や山形県からの県外向けの供給量が増えるなど、供給元が分散する動きが見られました。

#### 4. おわりに

以上の結果から、原木やおが粉の

原料となる丸太の流通量は、原発事故を契機として全国的に減少し、特に福島県の県外向けの供給量の低下が北海道や東北地方全体の供給量や供給先に大きな影響を与えたことが分かります。

原木については、岩手県では県内向けの供給量が減少した一方で、県外向けの供給量が増加しています。このことから、県内で利用できる原木が相対的に少なくなっている可能性が考えられます。

こうした状況から、県内の原木資源の確保をめぐる競争が強まり、原木の調達が難しくなっている状況が示唆されます。実際に、県内の原木しいたけ生産者への聞き取り調査においても、原木不足や将来的な供給への不安の声が多く聞かれました。

そのため、今後は原木の安定的な確保が重要な課題となります。ナラ林の育成、更新や未利用資源の活用などによる供給体制の強化に向けた取組が必要です。

※1 農林水産省「平成22年特用林産基礎資料」及び「令和6年特用林産基礎資料」  
※2 遠藤 展ほか3名「原木1m<sup>3</sup>当たりのオガ粉発生量について」林産試月報、19083。

岩手県林業技術センター研究部

主任専門研究員 中軽米 聖花

019（697）1536

#### 平成22年

流通量  
全国 235,027  
北海道・東北 56,037

（単位：m<sup>3</sup>）

※ 丸太材積に換算した値



#### 令和6年

流通量  
全国 187,413  
北海道・東北 21,940

（単位：m<sup>3</sup>）

※ 丸太材積に換算した値

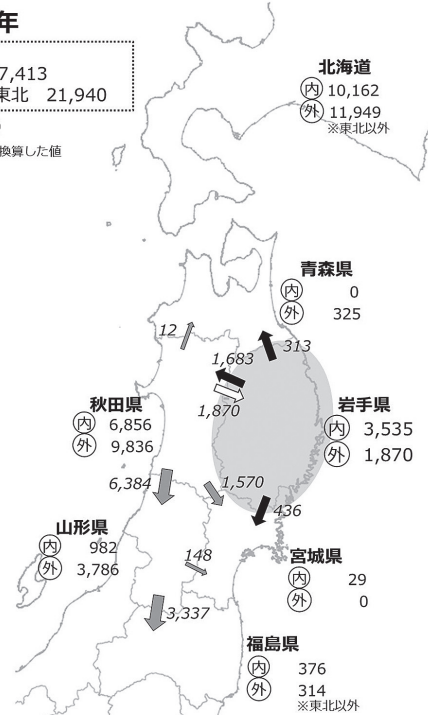


図2 おが粉（菌床栽培）の流通状況

（出典：農林水産省「平成22年特用林産基礎資料」及び「令和6年特用林産基礎資料」を基に作成）

凡例

（内） 県内向けの供給量  
（外） 県外向けの供給量  
岩手県から供給  
岩手県に供給  
他県間の供給  
5,000m<sup>3</sup>以上  
1,000～10,000m<sup>3</sup>  
1,000m<sup>3</sup>未満